報国山光明寺は粟生野にあり、宗旨は浄土宗西山流義の一本寺なり。本尊は円光大師の坐像にして自作なり。〔法然上人四国へ左遷し給ふ時、母儀の消息を以て作り給ふ本尊なり。世に張籠の御影といふ〕阿弥陀堂の本尊は恵心僧都の作にして、江州堅田浮御堂千体仏の中尊なり。熊谷蓮生法師諸国を負巡りて此所にとゞまり、草庵をいとなみて安置す。法然上人の廟、蓮生の塔は、本堂のうしろの山上にあり。石棺は阿弥陀堂の傍にありて、方丈には御鉢釈迦仏を安置す。それ当寺の草創は、法然上人の滅後十六年にあたづて、叡山の衆徒念仏宗の繁茂する事を深くねたんで、上人の御作撰択集を破して、弾撰択集を并榎竪者定 照房といふもの著し、隆寛律師のもとに送る。隆寛 則其答に顕撰択集を述て、汝が僻案のあたらざる事は暗夜の礫の如しと書す。山徒大に憤て、三塔に触流し大衆蜂起して、円基僧正に讒し、奏聞を遂て隆寛を遠流に行ふ。又上人の墳墓を破却せんと評議まち〳〵なる事を、徒弟これを聞て大に歎き、御塚を他所へうつすべしと、夜に入て人しらず石棺を掘出し、其外上人所持の影像をそへて太秦来迎坊のかたに送る。其翌年安貞二年正月にいたりて、上人の石棺より光明かゞやきしかば、来迎坊あやしみ光のすゑを尋るに、太秦より遥の南のかた粟生野のほとりに至る。則此所に住する幸阿弥陀仏のもとに来りて其趣を語るに、幸阿弥も不思議の霊告ありて、互に符合す。夫より上人の徒弟太秦より石棺を粟生野にうつして是を開き見れば、上人の面貌の存日の如し、則当寺の山腹において荼毘す。時に忽然として紫雲空にたなびき異香四方に薫ず、則舎利を拾ふて廟堂を造立し、浄土一宗の宗廟となす。〔紫雲覆ひし所に松ありて、これを紫雲松となづく、今堂前にあり。以上当寺縁起の意をとる〕

惣じて当山は殊勝の地にして、山林の陰には宝閣そびえ、常行念仏の声たえず、講堂には万巻をひらいて真如の月を探る、秋葉閑に風を待て黄金を布の祇陀園（をん）ともいひつべし。〔当寺の本堂は近代の建立なり、恰好比類なし、後代造立の規矩とす〕